

R6年度 福井県立武生東高等学校 学校評価書

項目	R6取組	成果と課題	改善策・向上策
重点目標 1 教育課程 および 学習支援	a : 「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善を推進する。」	授業中に内容について考える時間が十分にあるか」に対しては80%以上が、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答している。「話し合う活動や説明し文章に書く活動がよく行われているか？」に対しては、国語、数学、英語は80%以上が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答しているが、社会、理科は約60%となっている。各教科で、授業研究を行い、ますます主体的で対話的な学びを推進する取り組みを増やしていく。	10月の授業研究週間の統一テーマは「主体的・対話的で深い学び」としている。それぞれの教科で効果的な活動を共有し、実践する取り組みを進めていく。主体的に学ぶために、タブレットを利用した活動は有効である。興味ある内容を深く調べ、視覚的に捉えて理解し、自分の意見をまとめるような活動を増やしていく。さらに、じっくりと考え、対話し、表現する活動を学校全体の授業研究のテーマとして推進していく。
	b : 「教科連携を通して、多角的な視点で学ぶ授業を実践する。」	「知識や思考力、表現力が身につくような授業が行われているか？」に対し、3年生80%、2年生79%、1年生85%が「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。物理の力学と数学のベクトル、化学の計算と数学の指数法則、公共と家庭基礎の環境問題など教科間で共通するテーマについては、今後も連携を密にしていこう。さらに、統計的な解析や処理については、すべての教科に関わることであり、多角的な視点で捉えられるよう指導する。	授業研究週間に他教科の授業を互見する取組を続けている。教科連携のヒントになることが多いので、この期間だけでなく、他教科の授業内容を見る機会を増やしていく。連携している授業を年間授業計画の適切な時期に配置し、連携することの効果をもさらに高める。生徒の発想をより引き出すため、設問の方法を工夫することも大切である。
重点目標 2 進路支援	a : 「目標とすべき将来の生き方・進路を考えて進路計画を立てるとともに、その実現に向けた取組を進める。」	「進路ストーリーに基づき、生徒の進路に応じた個別指導体制」に関しては、担当する教員や、生徒・保護者とも一定の評価をしている。特に進路を決定していく3年生は、入試に向けた進路ガイダンスや進路講演会や小論文講座などの行事もあり評価は高い。志望校を固めていく2年生は、毎月教室に、今すべき進路活動を掲げ、2学期には志望理由書をまとめる講演を例年より早く計画した。1年生ではFTを利用した大学の出前講座などを学年会を中心に実施した。(3年85.7%、2年84.1%、1年79.6%)	各学年とも学期始めに進路ストーリーを教室に掲げ、計画性を持った進路指導を行う。また、進路ガイダンス等で説明した抜粋資料を教室に掲示することで、継続的な進路支援につなげる。 また、大学の先生から自身の研究内容に関する講演会などをFTを活用し計画することで、将来の目標を明確にもてる生徒の育成を目指す。さらに、2年生は志望理由を考える行事を夏以降に行い、進路への意識を早期に持たせる。
	b : 「自己の適性を理解し、興味関心ある分野の探究を深める意識を醸成する。」	本年度より、「外部指導者からの助言や支援を受け、主体的な探究活動をした」から「課外教育活動(学問発見講座、ビブリオバトルなど)に積極的に取り組んだ」という質問項目に変更した。どの学年もやや低い評価になっている。(3年70.6%、2年62.3%、1年78.8%)	課外教育活動は、校内の模擬授業や大学のオープンキャンパス、また、模擬講義に参加することで、興味関心が深まり成果が上がっている。学問発見講座やビブリオバトルを含めて、生徒たちが校内校外の興味ある行事に参加し、自分の適性を理解する活動につなげる。
重点目標3 生徒支援	a : 「生徒自らが、校則を含めた現状の問題点を見だし、仲間と協働して、学校生活の向上を目指す。」	「本校の生活指導は、自分にとって日常生活やマナーや社会のルールについて意識させるものとなっている。」に関する生徒評価が、1年生で76%、2年生で75%、3年生で87%である。ここ5年間で毎年、時代に合わない校則を改定する運動を進めてきた成果が上がっている。(教職員75%、保護者は90%) 「部活動や委員会・学校行事は、自分にとって学校生活を充実させるものとなっている。」に関する生徒評価は、生徒全体で約90%である。生徒支援部の仕事の柱の一つであり、高い評価となっている。(教職員96%、保護者90%)	今後も生徒主導で、実情に沿った校則改定を行っていく。その際、生徒会には、「統一L T」や「生徒会便り」を通して、「現行のルールがある理由」「改定する理由」を他の生徒達と共有しながら進める。 部活動や、委員会、学校行事をこれまで以上に生徒主体の活動にすることで、学校生活の満足度を高める。
	b : 「L Hや避難訓練を通し教員・生徒共に防災意識を高める。」	「心身の健康や安全な学校生活への配慮がなされている。」に関する生徒評価は、1年生で92%、2年生で88%、3年生で87%である。災害時に生徒たちの安全を守るため、全ての部屋に「避難経路図」を張り、「避難訓練」を実施し、被災時にどのように行動すべきかを確認してきた。 近年の異常気象を鑑み、熱中症対策を行ってきた。	日程調整を工夫し、3年に一度は、臨機応変的な避難訓練を実施する。 熱中症対策の一つとして、来年度は体育祭を越前市アイシンスポーツアリーナで実施する。

R6年度 福井県立武生東高等学校 学校評価書

項目	R6取組	成果と課題	改善策・向上策
重点目標4 グローバル・サイエンス・SDGs	a:「探究活動に取り組むことで生徒の論理的な思考を育み、自分の考えを発信する力を育成する。」	1年生では理数探究基礎、2年生では総合的な探究の時間・地域学・理数探究、3年生では総合的な探究の時間・理数探究を通して、生徒の論理的な思考を育み、様々な発表の機会を通じて、自分の考えを発信する力を育成してきた。探究学習に積極的に取り組んだ生徒の割合は、1年生88.3%、2年生89.1%、3学年90.7%、また、教員では89.7%であり、学校全体として積極的に探究活動に取り組むことができた。県内大学、越前市役所、地域の経営者との連携をさらに広げ、生徒の様々な関心にあわせた支援を強化する必要がある。	探究学習の授業を木曜日から水曜日に変更し、連携協定を締結している福井大学国際地域学部のPBLと同時間に実施することで、より多くのアドバイスや支援を受けられるようにする。さらに、生徒の様々な関心にあわせた支援ができるよう連携先を広げる。
	b:「英語セミナー・WHF等の学校行事を通して、異文化交流活動を推進する。また、授業やフロンティアタイム等において理数への興味をもち、探究活動を推進する。」	4月と9月に姉妹校が来校、8月には姉妹校を訪問するなど本年は活発に国際交流を行った。これらの活動は本校の大きな特色であり、今後も積極的に実施していく。9月に実施した国際会議(WHF)は、姉妹校のザビエル高生とは対面で、ブータンやフィリピンからの参加者とはオンラインで実施し、4か国66名が参加した。参加者満足度は91.7%であった。2月に実施する英語セミナーでは、次年度グローバル科に進む生徒が参加し、実践的な英語活用能力を高めることを目的に実施する。また、オンラインでニュージーランドの姉妹校との交流活動も実施することができた。 1年生では、フロンティアタイムや理数探究基礎という授業を通して理数に関する探究活動を進めている。また、福井工業大学と連携した実験授業を年3回実施したり、地元企業を訪問し、工業技術について学んだりすることで理数への興味を喚起してきた。	交流ルームや共同演習室を活用したオンラインでの交流活動に加え、8月に実施予定のニュージーランドの姉妹校訪問など本校と海外の高校生との交流をさらに充実させていく。 サイエンス、クエスト、グローバルの3科の特性を踏まえた探究学習を授業で進めていく。また、サイエンス科において、理数探究の授業やフロンティアタイムを活用して、理数探究の研究成果の集約と共有化、校外への発信を進めていく。
重点目標5 外部との連携	a:「オープンスクール、学校説明会等の実施やわかりやすいパンフレット、ホームページの作成により、学校教育活動の広報の充実に取り組む。」	オープンスクールに加え、学校説明会を5回実施し、参加者は100名を超えた。参加者の学校説明についての理解度は100%であった。また、学校HPにおいて、常に最新の活動を配信してきた。HP更新回数も80回を越え、積極的な情報発信に関する実感は、適切な情報発信をした教員の割合86.2%という結果にも表れている。 丹南地区各中学校に武生東高校だよりを7回発行し、情報発信を行ってきた。ターゲットを中学生に絞り、探究活動、部活動、研修旅行などテーマを設定して本校の取組みをわかりやすく伝えてきた。	企画総務部に加え、他の校務分掌などからの原稿作成の協力を得たことで、全校をあげて教育活動の充実と発信に取り組めるようになってきている。また、本校保護者や中学生とその保護者にもHP閲覧を通して、本校の教育活動の理解促進が図れるよう、PTAの会議など様々な機会を利用して、HPについて広報する。 学校紹介リーフレット、ポスター作成をはじめ学校説明会まで、スムーズな広報活動が実施できた。R7年度は、7月に中学3年生を対象としたオープンスクールを実施することに加え、できるだけ早期に中学生や保護者を対象とした学校説明会を実施し、中学生とその保護者のニーズにあった広報活動を行ってきたい。
	b:「Hino・Quest(総合的探究)において世代を超えた交流の場を増加する。」	大学の先生からの助言や支援を受け、探究活動に活かすことができたと回答した保護者は84.3%、教員は89.7%であった。のべ100名を超える大学教員や外部指導者から助言や支援を継続的に受けている。探究的な学習や進路につながる助言や支援が得られるよう連携を強化していく必要がある。	3つの科の特性を踏まえ、多角的・複合的に事象を捉え、課題を解決する力を身につける学びを充実させることが必要である。6年目を迎えた2年生時の課題解決学習において、県内大学などとの連携を通して、さらに充実させていく。また、自分自身の活動の省察や進路を考える時間の充実を進める。